



一貫コース通信

大学受験から学べる事（『青い鳥シンドローム』考）

昨年暮れから降雪の日が多く、正直な所いささか驚かされた。そんな中、今般の教育改革の目玉だった筈？…の、『大学入学共通テスト』が実施された。これまでの5年前間の議論はどこに行ってしまったのか？…と、思うのは私だけではないだろう。当初は一点刻みの批判に満ちていた筈なのに？…。また、話題の焦点は“英語の4技能”や“国・数の記述式”だったのだが、これも見送られた。そして、思考力と判断力を重視し平均50点目安で作問がなされた筈だが、実際の平均点はセンター試験並みに落ち着いたのである。恒例の事として、私も3教科の問題をやって見た。その結果から私なりにこれまでと比較することも出来なくはないが、“前・中・後”期の総てが終わった所で、専門家の総合評価が出ると思う。ここでは敢えて素人の評は控えておきたい。（これで教育改革は進むのであろうか…？）

この時期、いつも頭に浮かぶのは、果たして◎▲大学でなければ、本当に納得(妥協)が出来ないモノなのだろうか？…と言う事だ。受験生は誰でも第一志望を目標にする。何故なら、自分の将来を託す大学だからだ。従って、拘る事に十分意味は在るし、それを励みに頑張る事は大いに価値の在る事だ。ただし、飽くまでも、その意味が自分で理解出来ていての話だ。実際、多くの指導に関わり解った事は、意外にも大学を良く知らない(調べない)で、悪戯に◎○大学でなければ駄目とか、拘りならぬ固執だけのケースが少なくない事だ。例えば有名◎×大学でないと…とか、国公立◎■大学以上でなければ…云々である。齒に衣を着せずに言えば、日本は紛れもなく学歴社会で在る。良い悪いでは無い。私は経験からこの事実を否定しない。しかし、これが高じ意中の大学に結果オーライで合格はしたものの、本人の資質や志向は二の次になる現実は疑問に思う。以前、使われた用語に“青い鳥症候群”があった。メーテルリンクの著作『青い鳥』の中で、幸せの象徴“青い鳥”を主人公のチルチルとミチルが探しに行く物語である。しかし、追い求めた幸せは意外に身近に在る事に気づくストーリーから、「今よりもっと素敵な人が現れる…」・「今よりもっと良い仕事が見つかる…」と思う人間の心を暗喩する。ありていに言えば、理想と現実のギャップを自分以外に求め、根拠を持たずに先延ばしする傾向の事だ。つまり、こう言う癖は自分しか見えていないが故の不幸とも言えなくも無く、恐らくこうしたことは誰にでも当てはまる可能性があると思うのだ。

私は、この事を踏まえ、長年受験指導に当たり自分の実態を踏まえない浪人(一浪≡ヒトナミ)は、極力進めないで来たつもりでいる。ところで、全国の予備校の一浪生徒の5教科6科目の伸びしろのデータは、平均して46点と言われて来て久しい。勿論、個人差が在り高校時代の姿勢が前提になるが、冷ややかに見れば、これに一年の時間と、大学一年の学費同額をつぎ込む訳である。今稿はこの実態を肯定している訳ではない。こういう事態に陥らない為に自分を見つめ一所懸命努力しよう。努力こそが“青い鳥”を掴む手段なのだから。

